

「全国学力・学習状況調査」平均正答率東京都との差			
学年	第3学年		
年度	国語	算数	合計
令和12年度の目標			
令和11年度の目標			
令和10年度の目標			
令和9年度の目標			
令和8年度の目標	+1.0	+3.0	+4.0
令和7年度の結果	+0.1	-0.1	0
令和6年度の結果	-1.4	-1.5	-2.9
令和5年度の結果	-0.4	-0.4	-0.8

「江戸川区学力調査」平均正答率全国との差						
学年	第1学年			第2学年		
年度	国語	数学	数学	国語	数学	英語
令和12年度の目標						
令和11年度の目標						
令和10年度の目標						
令和9年度の目標						
令和8年度の目標	0	+2.0	+2.0	0	+3.0	+3.4
令和7年度の結果	-0.8	+2.0	+2.4	-1.3	+2.8	+2.8
令和6年度の結果	-1.4	+1.1	+1.1	-1.0	+2.1	+2.2
令和5年度の結果						

年度	令和7年度		令和8年度	
内容	成果と課題		目標	目標達成に向けた取組
学校全体	【成果】江戸川区学力調査では、2学年とも全教科全国平均を超えていた。特に数・英は5％以上の差があったので、学力は安定していると考ええる。また3年生の「全国学力・学習状況調査」では国語の平均回答数は都を超えていて、数学は超えていなかった。どちらも僅差のレベルのもので、学寮の定着はなされていると判断できる。 【課題】学力層という「D層」や全国学調での正解数1～4/5間の生徒が学年の20％を占めている。学力を底上げしていくことが1つの課題であると考ええる。		1 カリキュラム・マネジメントの推進→学ぶ楽しさの実感 ・教科横断的な学習の充実／PDCAサイクルによる授業改善／地域連携教育の推進 2 学びのユニバーサルデザインを基盤とした、教員の授業力の向上 3 対話的な学習活動→コミュニケーション能力の育成 4 読書を基盤とした探究活動の推進→基礎学力と探究力の育成	1 学力調査等データの分析を行い、重点指導項目の明確化や授業改善を推進する。また個別最適な学習として「家庭学習プロジェクト（KGP）」の実施や電子ドリル等の活用。 2 授業のUD化、ICT活用、研究授業の実施、さらには対話的（話し合い）を取り入れた授業構築と改善 3 週末テスト、補充教室、長期休業中の取り組み等により基礎学力の定着を図る。 4 図書室の蔵書管理システムを活用し、読書活動と探究的学習を連動させる。
第1学年	【成果】平均解答率の全国との差は3教科ともプラスであった。（国語＋2.3・数学＋6.4・英語＋7.9）特に応用では数・英が差を＋1.0であった。継続的に学びて更なる向上を期待したい。 【課題】学力層での教科間の開きがあることが課題であった。国語のA・B層は5.6％であった。これに対し、数学は6.2％・英語は6.4％である。国語の領域別平均正解率をみると、「知識・技能」の観点が全国平均を下回っている。言葉や言語文化に関する領域を苦手とする生徒が多いので、口語文法や語彙習得に向けた取り組みを工夫して行っていくことが重要であると考ええる。また日々の学校生活でのコミュニケーション活動でも、この領域は養われるので、対話的な授業や総合的な学習の時間や特別活動・道徳などにおいても、表現力の向上を目指した活動を意欲的に取り入れていくことも必要であると考ええる。継続的な指導を見守ってきたい。		・生徒に学ぶ楽しさを実感させる。 ・生徒たちの実態の把握を丁寧に行い、改善策を見出す。 ・常に指導方法について検討するスタンスで教育活動を実践する（授業改善への意識） ・江戸川区学力調査における目標数値を超えること。	・年4回の定期考査・年2回の校内学習アンケート・江戸川区学力調査を踏まえた集計データに元づく授業改善の実施。（考査問題も観点別・領域別に即した設問にして、常に平均正答率を出して、生徒の実態を把握し、それに応じた授業改善を繰り返していく。） ・データからの生徒たちの苦手としていることの分析をして生徒の実態を把握していく。
第2学年	【成果】平均解答率の全国との差は3教科ともプラスであった。（国語＋2.3・数学＋6.4・英語＋7.9）特に応用では数・英が差を＋1.0であった。継続的に学びて更なる向上を期待したい。 【課題】学力層での教科間の開きがあることが課題であった。国語のA・B層は5.6％であった。これに対し、数学は6.2％・英語は6.4％である。領域別平均正解率をみると、「知識・技能」の観点が全国平均を下回っている。言葉や言語文化に関する領域を苦手とする生徒が多いので、口語文法や語彙習得に向けた取り組みを工夫して行っていくことが重要であると考ええる。また日々の学校生活でのコミュニケーション活動でも、この領域は養われるので、対話的な授業や総合的な学習の時間や特別活動・道徳などにおいても、表現力の向上を目指した活動を意欲的に取り入れていくことも必要であると考ええる。継続的な指導を見守ってきたい。		・学習・指導計画の明確化 ・常に指導方法について検討するスタンスで教育活動を実践する（授業改善への意識） ・前年度の国語の江戸川区学力調査の課題を踏まえた生徒たちの実態把握と指導方法の工夫 ・生徒たちが読書科等で身につけたことを活用していけるようにする。	・年4回の定期考査・年2回の校内学習アンケート・江戸川区学力調査を踏まえた集計データに元づく授業改善の実施（考査問題も観点別・領域別に即した設問にして、常に平均正答率を出して、生徒の実態を把握し、それに応じた授業改善を繰り返していく。） ・言葉や言語文化に関する領域を苦手とする生徒が多いので、口語文法や語彙習得に向けた取り組みを工夫して行っていくこと。また日々の学校生活でのコミュニケーション活動で、この領域を養うための、対話的な授業を多く取り入れる。さらにや総合的な学習の時間や特別活動・道徳などにおいても、表現力の向上を目指した活動を意欲的に取り入れていく。
第3学年	【成果】上記の「学校全体」では都との比較で記載したが、2教科とも平均解答率は5.0％を超えていたのて、学力は平均的に身につけていると考ええる。全国との比較では、国語が＋3.3％・数学が＋4.7％であった。 【課題】無解答率をみると、国語は最後の2つの設問の割合が高かった。時間内に最後までとどき着けなかった生徒がいたように感じる。速断するや時間配分などに関して、身をもって体得する訓練を繰り返し行っていくことが課題の一つにあげられる。また数学では、記述式解答を求められた設問の割合が高かった。（5問中4問が3.0％以上で中には無解答率4.6％の問題もあった。）さらに、数量・図形・関数・データ活用の4領域に分けた場合は、図形の正解率が5.0％を割っていた。よって図形の証明問題を課題とする生徒が多いということが分析できた。事柄を文章等で表現する訓練を多く取り組んでいくことが重要であると考ええる。実際に「数学が苦手」と答える生徒は多く、さらに理由を尋ねると「図形の証明」を難解であると感じているようである。少人数の形態や「教えあい」などの対話的な授業を多く取り入れて苦手克服に向けた取り組みを継続的に行っている。苦手意識をもったまま本校を卒業し、上級学校へ進学していくことは避けたいということが願っている。苦手意識をもったまま本校を卒業し、上級学校へ進学していくことは避けたいということが願っている。		・学習・指導計画の明確化 ・常に指導方法について検討するスタンスで教育活動を実践する（授業改善への意識） ・全国学力・学習調査での無解答率の平均を一桁にしていこう（R7年度 国語6.6％・数学11.1％） ・生徒たちが読書科等で身につけたことを様々な場面で応用していけるようにする。	・年4回の定期考査・年2回の校内学習アンケート・江戸川区学力調査を踏まえた集計データに元づく授業改善の実施（考査問題も観点別・領域別に即した設問にして、常に平均正答率を出して、生徒の実態を把握し、それに応じた授業改善を繰り返していく。） ・文章を速断することや時間配分などに関して、身をもって体得する訓練を繰り返し行っていくこと。また数学の図形分野では、フィードバックや教えあい活動で図形が苦手な生徒を無くしていく。証明問題に対応する国語力の定着。オーソドックスな証明を基に自ら文章で証明問題を解いて、自信をつけさせて、「そ「証明問題を解く面白さ」を味わわせ、数学（図形）の苦手な生徒を無くしていく。さらに事柄を文章等で表現する訓練を多く取り扱う。